

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20265

研究課題名（和文）子どもの幼稚園・小学校参入時における学校的相互行為の組織化過程

研究課題名（英文）The process of organizing school interactions during children's entry into kindergarten and elementary school

研究代表者

粕谷 圭佑（KASUYA, Keisuke）

奈良教育大学・学校教育講座・准教授

研究者番号：80908492

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、子どもの集団参入に際して行われる幼稚園と小学校の相互行為上の共通点と差異を明らかにすることを目的とし、幼稚園入園時と小学校入学時の比較分析、幼稚園卒園から小学校入学までの追跡調査、教員の認識の比較分析に取り組んだ。このうち、基礎作業として、幼稚園入園時の相互行為分析を積み重ね、今後の幼稚園、小学校との比較分析のための基礎的な知見を得ることができた。また、多様な小学校教員への参与観察およびインタビュー調査を実施し、多様化する学校教育の現在と、教職に対する教師の認識に対する知見を得るとともに、論文・編著刊行など確かな成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題を通して得られた知見は、幼稚園における集団教育を成立させる際の集団編成の技法を、エスノメソドロジーの方法的立場から明らかにしたものであり、今後の小学校との比較分析をより確実に行うことを可能にするものであると考えられる。また、多様な小学校（オープンクラス、離島の少人数校）の参与観察および一般公立小学校での教員の聞き取り調査からは、それぞれの学校が持つ理念とそれに対する実践の関係を問い直すことが可能となり、理念レベルで語られることが多い学校教育言説への問題提起につながる点で意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the similarities and differences in interactions between kindergarten and elementary school when children enter a group, and to conduct a comparative analysis of kindergarten entry and elementary school entry, a follow-up survey from kindergarten graduation to elementary school entry, and a comparative analysis of teachers' perceptions. Of these, as basic work, we accumulated interaction analysis at the time of kindergarten entry and obtained basic findings for future comparative analysis between kindergarten and elementary school. In addition, we conducted participant observation and interview surveys of various elementary school teachers to gain insight into the current diversification of school education and teachers' perceptions of the teaching profession, and obtained solid results, including the publication of articles and edited volumes.

研究分野：教育社会学

キーワード：幼稚園 相互行為 エスノメソドロジー 社会化 小学校

1. 研究開始当初の背景

学校において子どもは、日常生活とは異なった、集団的な相互行為に参入することを求められる。この学校的な相互行為形式は、多様な生活史を持つ子ども集団に一齐に授業を行う、という現在の学校教育を可能にする基盤になっている。そのため、学校参入期の子どもと教師にとっては、学校的なやりとりを成り立たせることが第一の課題となる。この過程がいかにして成し遂げられているかを解明することは、子どもの「社会化」という古典的かつ根源的な問いに連なっている。こうした背景のもと、本研究は、子どもが学校的な相互行為に参与する過程のうち、それぞれ組織の新参者である「幼稚園年少」と「小学一年生」に着目し、子どもの集団参入時に行われる相互行為の共通点と差異を明らかにすることを目指す。この目的を達成することを通して幼児教育と小学校の両領域の特性を活かした接続の基盤となる知見や、学校における社会化過程を経験的に特定化した知見を提出していきたい。

多様な生活史をもつ子どもたちを相手に集団的な教育活動を行うためには、まずもって、子どもに学校的な活動を可能にする一定の振る舞いを身につけさせる(=社会化する)必要がある。こうした学校での「社会化」は教育社会学の主要な研究テーマとして取り組まれ続けており、学校に特有の活動に子どもが参与していく過程が検討されてきた。そのなかでも、子どもがはじめて学校的な空間を経験する「幼稚園への参入」と、義務教育の開始である「小学校への参入」は、子どもの社会化にとってそれぞれ重要な契機である。社会的課題としても、いわゆる小1プロブレムを背景として、幼小接続の充実が喫緊の教育課題でありつづけている。とりわけ、子どもの集団生活をめぐっては「幼稚園ではできていたのに小学校ではできない」という逆行した状況も現場レベルでは度々報告されており、幼稚園 小学校間の実践上の充実した接続を可能にする知見が求められている。

子どもの家庭でのやりとりを日常的な相互行為とするならば、それに対して、学校に特有の制度的な相互行為を要求されるという点で、幼稚園と小学校は共通している。一方、幼稚園と小学校の接続が自然なままでは起こり得ないのは、両者で要求される相互行為に差異があることを示している。それでは、子どもが幼稚園に新規参入するということと、小学校に新規参入することの間にはどのような共通点と差異があるのか。この共通点と差異は、理念レベルでは語られるものの、実践レベルで捉えられてはきておらず、経験的な研究が十分なされてこなかった。そこで本研究では、「子どもが集団に参入する際に、幼稚園と小学校にはどのような相互行為上の共通点と差異があるのか」を学術的問いとして設定し、これを明らかにすべく調査・分析を行った。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、子どもの集団参入に際して行われる幼稚園と小学校の相互行為上の共通点と差異を明らかにすることを目的として設定し、3つのプロジェクト、メイン研究A 幼稚園入園時と小学校入学時の比較分析、サブ研究B 幼稚園卒園から小学校入学までの追跡調査、サブ研究C 教員の認識の比較分析に取り組んだ。

研究A 幼稚園入園時と小学校入学時の比較分析

子どもが幼稚園に参入し「園児になる」と、小学校に参入し「児童になる」との違いはどこにあるのか。「園児」「児童」がそれぞれ集団のなかの1人として扱われる存在である以上、両者の違いは集団の組織化の違いに依存している。では、幼稚園と小学校では集団の作られ方にどのような共通点と違いがあるのか。この点を明らかにすべく、入園間もない年少児と保育者の相互行為と、入学間もない小学1年生と担任教師の相互行為を収めた映像を比較分析することを目的とした。分析アプローチとしては、エスノメソドロロジー/会話分析を用い、両者の集団的活動の組織化の特徴を記述することを目指した。

研究B 幼稚園卒園から小学校入学までの追跡調査

幼稚園の最高年次である年長児は、小学校では一年生として、再び組織の新参者となる。すでに幼稚園で一定程度学校的な行動様式を身に付けている子どもを「学校の新参者」として扱う相互行為にはどのような特徴があるのか。この問いに向けて、附属幼稚園卒園直前から附属小学校入学直後までの参与観察を行い、卒園時から入学時の追跡調査の準備作業とした。本調査によって得られた観察ポイントをもとに、より詳細な映像撮影調査を企画することを課題として設定した。

研究C 教員の認識の比較分析

幼小接続の取り組みでは、幼稚園教員と小学校教員の情報共有がたびたび行われるが、そもそも両者は子どもの集団生活を組織することに対して、共通の認識を持っているのだろうか。認識に隔たりがあるとすればそれはどのような隔たりなのか。この問いに向けて、幼稚園教員、

小学校教員、また幼稚園から小学校への異動を経験した教員へインタビュー調査を行った。各属性の教員の語りから、それぞれが、幼稚園小学校の各段階で集団をまとめることや、子どもの集団活動に対してどのような認識を持っているのかを比較し、教員間の認識の共通点と違いを明らかにする。

3. 研究の方法

メイン研究である幼稚園と小学校の初期場面の分析的比較 研究 A を行うためには、なによりもまず当該場面のデータが必要となる。本研究では、すでに、研究代表者が携わった共同調査のなかで、小学校 1 年生入学時から一年間を通して収集した映像データ(計 400 時間以上)および、幼稚園入園時から一年間を通して収集した映像データ(2 年分、計 350 時間以上)を収集済みであり、使用許諾を得ている。さらに、これらデータにはそれぞれ入園当初・入学当初から約 1 ヶ月間、毎日の連続した映像が収められており、入園・入学時からの子どもの変化を捉えるために非常に適したデータとなっている。メインの研究 A に対しては、これらのデータの分析を行うことを中心作業とした。

また、サブ研究 研究 B、研究 C に関しては、研究開始段階で関係を構築済みの調査対象園、および調査対象者への調査実施を行うとともに、新型コロナウイルスの影響を鑑みつつ、研究課題期間中にあらたに調査可能となった小学校への参与観察およびインタビュー調査を行うことで、課題の達成を目指した。

4. 研究成果

(2021 年度)

研究実施計画に基づき、研究 A 幼稚園入園時と小学校入学時の比較分析、研究 B 幼稚園卒園から小学校入学までの追跡調査、研究 C 教員の認識の比較分析に取り組んだ。研究 A では、入園間もない年少児と保育者の相互行為と、入学間もない小学 1 年生と担任教師の相互行為を収めた映像の比較分析にむけて、収集した映像データの整理および分析検討を進めた。特に集団活動時における園児・児童に対する保育者・教師の「注意」に着目し、それぞれの「注意」の相互行為上の構成が教示活動の達成に組み込まれていることが分析のポイントとして設定できた。また、幼稚園年少級の「列になる場面」「製作場面」における保育者の教示に着目した分析を行い、学術論文化を行った。研究 B では、調査対象幼稚園での参与観察を実施した。新型コロナウイルス感染拡大の影響のため綿密な追跡調査の実施は困難であることが判明したため、研究 B に関しては、追跡調査からスポット調査へと方法を転換し、「卒園式の練習」活動の分析へと焦点を変更する方針を取った。これに関して、2021 年度は、既存のデータの再検討を行い、約 300 分の映像データの整理作業を行った。研究 C では、小学校教員、また幼稚園から小学校への異動を経験した教員へインタビュー調査を行った。とくに、調査対象の小学校教員との共同研究を開始することができ、小学校での「多忙化」状況にある労働環境の分析を含めながら、教員の児童に関する認識の一旦を明らかにすることができた。調査対象の小学校教員 2 名との共同研究では、小学校での「多忙化」状況にある労働環境の分析を含めた学会発表を行った。とくに教師の「多忙化」の言説的展開、および「部活動の外部委託化」を論点にした議論を整理したことで、教師の労働環境の変化が、小学校の教育活動に及ぼす影響について、論点を設定することができた。以上の 3 つのテーマから、2021 年度においては、学会発表、大学研究広報誌への研究成果公表、学術誌への論文投稿を行った。

(2022 年度)

最終年度である 2022 年度においては、収集した映像データの整理および分析を進めつつ、2021 年度の研究実績を展開させる形で、アウトプットを行った。主な研究成果は以下の二点である。第一に、幼稚園、小学校双方において関連する、一斉教育場面における相互行為の分析を蓄積した。とくに、2021 年度に検討をはじめた集団活動時における園児・児童に対する保育者・教師の「注意」について、幼稚園年少級での「読み聞かせ」場面に着目し、教示活動の進行性と中断と、「注意」行為の接合がいかになされるのかを分析した。また、典型的な一斉教育形式との比較のために、へき地およびオープンプラン教育の学校への参与観察を行い、両者の比較分析を行った。第二に、小学校における教師の認識を捉えるにあたり、2021 年度から継続して、現職教員に対して、教職の状況それ自体に対する教師の認識を捉える調査を行った。とくに「多忙化」状況にある小学校教員の労働環境のなかで、「子どもと向き合う時間」という、子どもの成長や学習に関連したキーワードが、いかに教師の語りのなかで特徴的に現れているのかを検討した。以上の研究成果のアウトプットとして、2022 年度においては、学会発表、商業誌の公刊、学術

誌への論文投稿を行った。本研究課題の目的に照らしたとき、研究期間全体を通じて、研究 A 研究 C においては一定の成果を挙げる事ができた。研究 B については、新型コロナウイルスの影響を受けたことで、観察調査は十分な形では実施できなかったが、調査の基礎作業となる文献調査および幼稚園教諭への聞き取りが実施できたので、今後観察調査へと展開させていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 粕谷圭佑・平井大輝	4. 巻 1
2. 論文標題 学校的相互行為の比較社会学序論 へき地少人数校とオープンクラス実践校の参与観察から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 連携教育開発センター紀要	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20636/00013600	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 集団活動の教示としての「注意」：幼稚園年少級における保育者-園児間の相互行為分析
3. 学会等名 日本子ども社会学会 第28回大会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 粕谷圭佑
2. 発表標題 保育者と園児の間合い：教示の協働的達成はいかに成し遂げられるか
3. 学会等名 日本認知科学会「間合い」研究分科会 第19回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 粕谷圭佑・井筒優菜・岸上直樹
2. 発表標題 社会問題としての 教師の多忙化 新聞言説と教師の語りに着目して
3. 学会等名 日本教育社会学会 第73回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 片山悠樹・寺町晋哉・粕谷圭佑	4. 発行年 2023年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 192
3. 書名 現場から変える！教師の働き方	

1. 著者名 粕谷圭佑	4. 発行年 2022年
2. 出版社 奈良教育大学出版会	5. 総ページ数 8
3. 書名 「静かにしてください！」 授業場面の作られ方の社会学的考察	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------